

回遊性種飼付け実用化事業

漁業科 三 薺 徹・篠原 英一郎

平成元～5年度の5ヶ年事業として実施してきた飼付け型栽培漁場技術開発事業では、シマアジを主な対象種として、小型魚の不合理漁獲を防ぎ、放流効果を向上させることを目的に飼付け手法を用いた放流技術の開発試験を行ってきた。その結果、シマアジは放流後も高い割合で飼付け基盤周辺に滞留し、飼付け放流に適した魚種であることが明らかになった。しかし、飼付け放流には飼付けコストを考慮した経済的な方法や、放流効果の範囲と受益者負担のあり方など解決すべき課題は残されている。

本事業はこれらの課題を解決し、飼付け型栽培漁業の実用化に資するため、平成6～10年度の5ヶ年事業として新たにスタートしたものである。

内容の詳細については既報（平成6年度回遊性種飼付け実用化事業報告書）で述べているので、ここでは概略について報告する。

1 中間育成

日裁協上浦事業場で生産されたシマアジ人工種苗32,000尾（T.L. 34mm）を平成6年4月20日に、また、県内で生産されたシマアジ4,000尾（T.L. 50mm）を平成6年5月24日にそれぞれ受け入れ、幡多郡大月町の古満目湾の小割生簀で中間育成した。これらのシマアジは中間育成終了時の8月31日には平均全長107mmに成長し、生残尾数は24,500尾、生残率は68.1%であった。

2 飼付け試験

中間育成を行った大月町古満目湾の小割筏を飼付け基盤とし、飼付け試験を行った。

中間育成した日裁協・県内産のシマアジ11,200尾（F.L. 103mm）を9月13日に、日裁協・県内産のシマアジ13,300尾（F.L. 117mm）及び古満目湾で馴致飼育した小笠原産シマアジ18,750尾（F.L. 104mm）を10月26日にそれぞれ飼付け基盤に標識

放流し、配合飼料を1日1回、自動給餌機で給餌して飼い付けた。

放流直後の逸散はみられず、9月下旬に接近した台風で一部が逸散したものの、平成7年1月中旬で、飼付け基盤周辺に約20,000尾の滞留がみられた。しかしその後、隣接する民間養殖業者の生簀の方へ徐々に移動し始め、2月には全てのシマアジが民間業者の生簀付近に滞留するようになった。

3 漁獲実態調査

飼付け基盤周辺海域におけるシマアジの漁獲動向を把握するため、漁獲量調査及び市場調査を実施した。

- (1) 平成6年の宿毛市漁協のシマアジ水揚量は、一本釣での漁獲が伸びたものの、例年主体となる定置網での水揚げが減ったため、全体としては前年比377.9kg減の1,491.3kgであった。また、飼付け基盤のある古満目漁協のシマアジ水揚量は、定置網、一本釣ともに大幅に増加し、総計で855.3kgとなった。
- (2) 宿毛市漁協に水揚げされたシマアジについて、市場調査を実施した。

放流シマアジは7～9月頃に尾叉長25cm前後で再捕され始め、12月には40～45cm位に成長し漁獲される傾向がみられた。しかし、尾叉長45cm以上のシマアジの再捕は非常に少なく、放流魚以外のシマアジにもほぼ同様の傾向がみられることから、尾叉長45cmを越えたシマアジは本県の沿岸漁場域から移動していく可能性が示唆された。

4 平成3～5年度放流群

平成3～5年度放流群のシマアジについて、移動・分散状況とともに、放流効果の把握を行った。

- (1) 平成3年放流群の推定回収率は6.03%であっ

た。

(2) 平成4年放流群の推定回収率は3.11%であった。

た。

(3) 平成5年放流群は湾内からの逸散魚が古満目

湾口の定置網へ一時に大量入網したことや、飼付魚の一本釣による一斉回収を行ったこともあり、12月末現在で7.84%とかなり高い回収率を示した。